

令和5年度 函館市総合教育会議 会議録

- | | |
|-------|--|
| 1 日 時 | 令和5年11月28日(火) 午前11時15分 |
| 2 場 所 | 函館市立桔梗小学校 |
| 3 出席者 | 【構成員】 大泉市長, 藤井教育長, 木村委員, 小葉松委員, 神田委員, 國谷委員 【事務局】 川村生涯学習部長, 小笠原学校教育部長, 横田生涯学習部次長, 金野教育政策推進室長, 川崎管理課長, 白川学校教育課長, 酒井教育指導課長, 櫛田教育政策課長, 木村庶務係長 【発表者】 桔梗小学校 近江校長, 阿部教頭, 名本主幹教諭 【その他】 山本ICTサポーター |
| 4 欠席者 | なし |
| 5 傍聴者 | 傍聴者2名, 報道関係者1名 |
| 6 次 第 | 1 開会 2 協議事項 (1) 函館市がめざす「令和の日本型学校教育」 ア 説明「函館市がめざす『令和の日本型学校教育』」 イ 事例紹介「桔梗小学校の取組について」(校内視察, 事例発表) (給食試食) ウ 意見交換 (2) その他 3 閉会 |

1 開会

■金野教育政策推進室長

それでは, 定刻となりましたので,
ただいまから, 令和5年度函館市総合教育会議を開催いたします。

私は, 議事に入るまでの進行役を務めさせていただきます, 教育委員会学校教育部教育政策推進室長の金野でございます。よろしくお願いいたします。

はじめに, 会議の主催者であります, 市長からご挨拶をいただきます。

大泉市長, よろしく願いいたします。

■大泉市長

本日は, ご多忙の中, 令和5年度函館市総合教育会議にお集まりいただきまして, ありがとうございます。教育委員の皆様には, いろいろな場面で本市の教育行政の推進にご尽力をいただきまして, ありがとうございます。この場をお借りいたしまして, 厚くお礼申し上げます。

また, 毎年開催しておりますこの総合教育会議ですが, 私にとっては初めてでございます。皆様ご承知のとおり, 地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づいて開催されて

おりまして、教育を行うための諸条件の整備、その他地域の実情に応じた教育、学術および文化の振興を図るため重点的に講ずべき施策について協議、調整を行い、市長部局と教育委員会が方向性の共有をして、教育施策を進めることを目的としているところであります。

本日の協議事項につきましては、「函館市が目指す『令和の日本型学校教育』」となっておりますけれども、教育委員会におきましては特別支援教育支援員や学校司書、外国人助手、学校ICTサポーターなど、学校整備の向上を図るために様々な外部人材を活用していると思っておりますが、本日は、実際に学校現場を参観し、桔梗小学校から発表する予定であります。

私といたしましても、これからの時代を担う子どもたちの未来を守り、地域で安心して子どもを育てていける学校整備が重要であると考えております。限られた時間の中ではございますが、委員の皆様と忌憚のない意見交換をさせていただきたいと考えておりますので、よろしく願い申し上げます、簡単ではございますが、私からの挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

■金野教育政策推進室長

それでは、2の協議事項に入らせていただきます。

「函館市総合教育会議の運営に関する要綱」第3条の規定に基づきまして、この後、会議の進行を、市長にお願いしたいと思っております。市長、よろしくお願いいたします。

■大泉市長

それでは、次第に沿って議事を進めます。協議事項の(1)函館市がめざす「令和の日本型学校教育」について、教育委員会事務局から説明してください。

■小笠原学校教育部長

小笠原と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私から「令和の日本型学校教育」について発表説明します。座って説明させていただきます。前方のスライド(お手元の資料)をご覧になりながらお聞きください。よろしくお願いいたします。

急激に変化する社会や時代の中で、育むべき資質・能力といたしましては、一人ひとりの児童生徒が、下の矢印下に記載させていただきましたが、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められているところでございます。

今まで子どもたちの知・徳・体を一体として育む「日本型学校教育」を学校におきまして行ってきましたけれども、その良さを受け継ぎながら、さらに発展させるということで、今日の学校教育が直面している課題としては、こちらの方に6点ほど記載させていただいています。さらに新しい動きということで、大きく3点ほど記載しております。これらを踏まえまして、新しい時代の学校教育のありかたとして、令和3年1月に令和の日本型学校教育が文部科学省の中央教育審議会から示されたところでございます。

令和の日本型学校教育がめざす学びとは二つございますけれども、まず一つは「個別最適な学び」、2点目は「協働的な学び」でございます。

「個別最適な学び」におきましては、「個に応じた指導」を充実させるために、ICT環境の活用、少人数による指導体制を整備し指導の個別化、それから学習の個性化を図ります。

「協働的な学び」におきましては、探究的な学習や体験活動等を通じながら子ども同士や多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重して、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成します。

2020年代に実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿といたしましては、スクリーンに向かって右上の方に子どもの学びということで、黄色で記載しております。全ての子どもた

ちの可能性を引き出すために「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指すところでございます。

今後の方向性に関わりましては、「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学び」を実現するためにということで、3点ほど記載させていただきました。まず1点目は、学校や教師がすべき業務・役割・指導の範囲・内容・量の精選・縮減・重点化でございます。2点目につきましては、学校と地域社会の連携協働。3点目としましては、教育の質の向上のため、ICTの活用を前提にしながら、一斉授業か個別学習か、デジタルかアナログかという「二項対立」の陥穽（かんせい）に陥らないことに留意すべきであるということです。

どちらかだけを選ぶのではなくて、発達の段階ですとか学習場面等により、どちらの良さも適切に組み合わせると、そういった考え方に立つ必要がございます。

矢印の先には6点ほど改善に向けた今後の方向性が出ています。

これらを踏まえながら、令和の日本型学校教育をめざして、三つの方向性を踏まえまして、函館市におきましては、函館市立の学校に多様な外部人材、そういったものを配置しているところでございます。

そこで桔梗小学校さんを例にさせていただきますと、例えばご覧いただいているスライド上から向かって左から3点目に外国人助手（ALT）という記載があると思います。それから小学校外国語サポーター。その下の学校ICTサポーター。それから向かって右上ですけれども学校司書。それから教員業務支援員こちらは道教委の事業（スクール・サポート・スタッフ）配置とあるんですが、さらにその下には特別支援教育支援員等のこれらの外部人材を配置・派遣しているところでございます。

また、必要に応じましてスクールソーシャルワーカーが本市では2名おります。それからスクールカウンセラーですとか、こころの相談員が教員や保護者、児童生徒の支援や相談に応じたり、関係機関と連携を図ったりしています。向かって右側一番上、日本語指導補助と出ていていると思います。日本語指導が必要な児童生徒につきましては、学校生活に適應できるように日本語指導の援助をする支援員を活用しまして、基礎的な日本語の修得ですとか授業の理解などを支援・サポートしているところでございます。

続きまして、本市全体の話になりますけれども、今年度からスライドの右側、向かって左側が不登校児童生徒の、校内サポートルームの写真を記載させていただいております。

不登校生徒支援非常勤講師を5名配置させていただきました。「登校はできても、自分の所属教室へ入ることができない生徒」に対応しているところでございます。スライド向かって右側ですけれども、こちらは南北海道教育センターに設置しました「サポートベース函館」でございます。こちらは「外出はできるけれども、登校ができない児童生徒」に対して、専任指導員と特別支援教育支援員が対応しているところでございます。

以上、函館市立学校へ配置されている外部人材や専門スタッフの紹介をさせていただきました。令和の日本型学校教育をめざすために、多様な人材が児童生徒の指導に携わることが必要であり、また今後も教育委員会といたしましては、各学校の教育活動が充実することができるように、これらの外部人材の配置等に引き続き取り組んでいきたいと考えているところでございます。

これで「函館市がめざす『令和の日本型学校教育』」についての説明を終わらせていただきます。

■大泉市長

ただいま事務局から説明がありました。

協議事項ウ 意見交換 で皆さまのご意見など伺いたいと思います。何かございますでしょうか。

■大泉市長

私が聞くのも何なんですけど、聞いてもいいでしょうか。スライドの最後から3番目にあ

る、市立の学校へ配置の件・派遣の件。その次になると思うんですけども、日本語指導補助というのは右上あるじゃないですか。どういったお子さんが日本語指導を受けるのかイメージできなかつたんですね。少し教えてもらいたいです。

■小笠原学校教育部長

こちら日本語指導が必要な児童生徒、令和4年度ですけれども、具体的な人数をご紹介しますと5名ということになっております。三つの小学校、一つの中学校で指導を行っているということです。令和5年度現在は4名いらっしゃいまして、一つの小学校、二つの中学校で指導しています。こちらにつきましましては、関係団体の協力を得て行っておりまして、指導する先生が週1回ですとか、週2回ですとかお邪魔しまして説明がある。授業について別室で個別指導を行うケースもございますし、授業をしているときに付き添って、理解を促す指導を、週2回または毎日実際に行っているところもございます。お子さんの状況に応じながら、定期的にお邪魔して対応しているということになります。

■大泉市長

ありがとうございます。なぜ聞いたのかと言いますと、今日のテーマとはずれますが、いずれ日本全体の人手不足がある中で、おそらく外国人がどんどん入ってくる国になるでしょうし、地域も増えてくることも予想していきまして、今は多分製造業とか、農業とか、そういうエッセンシャルワークの方、いずれはITなのだろうし、高度人材が集まってくるような、そういう街になることが大事だと思っているのです。そういう人がお子さんを連れて入ってくる時代になるのかなと思ったり、そのときにお子さんの日本語教育ってどうなるのかなという、僕自身あまりわからなかったものですから、現在どれくらいの数がいて、どういったお子さんがいるのか興味がありましたのでお聞きしました。

■大泉市長

ほかにどなたか、ありますでしょうか。

■藤井教育長

カナダとかアメリカは、深刻な問題が20年以上ございまして、第二言語としての英語教育をどうするか、その研究をされていきまして、北海道はもともとカナダから専門の先生が来て第二言語としての英語をずっと研究していた時期があります。

市長ご指摘のとおり、函館もベトナムだとかフィリピンの方だとか、たくさんいらっしゃいますので、今はそういった方々に対してボランティア団体などが日本語を教えたりしています。いずれ日本語指導が必要な子どもたちがたくさん出てくると想定されますので、市長が指摘された日本語指導補助というのは検討していきたいと思っています。

■大泉市長

はい、小葉松先生

■小葉松委員

少し脱線しますが、私は医療の現場にいて英語ができない外国人、水産加工とかに来ている中国の方々などいっぱいいると思いますが、今の政府の方針だと5年以上滞在できるような大人たちを入れていくとなると、大人に対する日本語教育っていうのも考えていけないといけない。

今は、翻訳機があるからまだ用事は足りており、子どもは学校現場での対応となるが、その親御さんたちって英語がしゃべれない、お父さんは英語ができるけれども、お母さんは母国語しかできないご家族も非常に多く、私も職業柄、対応しなくてはいけない。外国人が増えたとき、市の政策としても大人に対する日本語教育っていうのを、ちょっと頭の隅に入れておかないと、非常に混乱と分断が生じてくる。

昔からドイツは、短期滞在の外国人も誰でも無料でドイツ語を学べるような場所が用意されていると聞いたことがありまして、全く分からなくても1年ぐらいいると、そこそこ語学習得できる施設がある。これからは大人のことも少し考えた方が良いのかと思ひ発言させていただきました。

■大泉市長

ありがとうございます。他になにかありますでしょうか。
神田委員どうぞ。

■神田委員

私、本通中学校と南本通小学校で、外部人材の中に入っております地域コーディネーターをしております。最初、地域コーディネーターができたときには、学校外部人材を入れまして、普通に市民の方、高齢者の方を入れるっていうのに、どういう形で入れていくのかなというのを、模索しながらやっていた時期がありましたが、今現在では地域の方を入れることによって、小学校では小さな低学年のお子さんと一緒に学習活動サポートに入っていたり、中学校でも課外授業等に地域の方だったり、保護者の方々が入って学習しているということ繋がる役目をしております。

そういう中で、最初の頃は漠然としたコーディネーターというものに対して、学校も生徒の方もどうしようと迷われていたと思いますが、だんだんと年数が経っていくうちに学校のニーズが、こういう形で地域の人を入れていきたいというのが、コーディネーターとして見えてきた。地域の方も1回入ってしまうと、当たり前のように「学校の学習サポートするのよね」みたいな感じで、学校に入っていくことを抵抗なくやってくさるということが、実際に見て分かってきました。ですので、地域の方の高齢者の見守りの部分でも学校が役に立つというのも見えてきますし、学校もそういった方が入ってくださることによって、人手不足というのは変ですけども、そういった方が学習のサポートをすることで、子どもたちも、外部人材という、自分の親御さんや祖父母の方以外の方との接触によって、かなりちょっと大人びたところを見たり、気を使っているなというのが見えたりして、いい傾向が出てきたなと感じています。

■大泉市長

はい。ありがとうございます。このあと、まだ意見交換の時間を用意しております。それでは、続いて校内見学した後に学校取組事例の発表をしていただきたいと思います。よろしくをお願いします。

■桔梗小学校近江校長

それでは、校内ご案内いたしますので準備していただいて、ご一緒していただければと。よろしくをお願いします。

(桔梗小学校の校内視察)

■大泉市長

それでは、桔梗小学校から、協議事項の(1)のイ 事例紹介をお願いいたします。

■桔梗小学校名本主幹教諭

桔梗小学校主幹教諭の名本です。本校における学校DXの取組についてご紹介いたします。ソサエティ 5.0 時代を生きる子どもたちに、変化する社会を生きる力を付けることが求められています。そのために、GIGAスクール構想で整備された学習用端末を積極的に活用して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びを実現することが必要です。

本校における、デジタル技術を活用したこれまでと異なる学びの姿「桔梗小 学びのDX」を実現するために、「新しいかたちの学び授業力向上推進事業」「校内研修」「専門家・家庭との連携」の3つを柱として取組を進めています。

「新しいかたちの学び授業力向上推進事業」は、3名の推進教員が勤務校を巡回し、授業改善を推進していく道教委事業です。

推進教員は、学級担任とのTT(ティーム・ティーチング)を通じ、好事例の普及などを通じて授業改善を図っています。適宜、通信を発行したり、アンケートを取りまとめたりしており、市内6校の小学校を巡回しています。

「校内研修」では、「指導言の精選」や「理解を深める対話」など、これまで積み重ねて

きた桔梗小の「主体的・対話的で深い学び」の実現を土台としています。

そこへ、ICTの活用の推進を取り入れ、今年度は「端末の日常的活用」と「端末とノートを組み合わせ」を視点を校内研修を進めています。また、教員全員が授業公開を行う「一人一授業」と自校の教職員を講師とした「ICT活用研修」を行い、教職員の指導技術の底上げを図っています。

「専門家・家庭との連携」では、函館市ICTサポートセンターの山本さんをはじめとした様々な専門家の方に情報提供いただいたり、参集型・リモート型の様々な研修会に出席したりするなど、意欲的に研修を進めています。学校DX戦略アドバイザーの新保先生には、専門的な見地から、学校DXにおける授業改善に向けたアドバイスをいただいております。

本校では、毎日端末の持ち帰りを行い、週2回学習ソフトを用いた家庭学習に取り組みます。つまずきに応じた学び直しもできるなどICTのよさを感じています。

本校の「学びのDX」の事例についてご紹介いたします。

一斉学習の場面では、実物投影機やデジタル教科書の活用が効果的です。挿絵や写真などを拡大・縮小、画面への書き込みなどを行うことで、分かりやすく説明することが可能です。

「個別最適な学び」は、一定の目標を全ての児童が達成することを目指し、個々の児童に応じて異なる方法などで学習を進める「指導の個別化」と個々の児童生徒の興味・関心に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げる「学習の個性化」がございます。

「指導の個別化」の事例についてご紹介いたします。

1年生の算数「箱の形を仲間分けしよう」では、実物を用いて箱を弁別して学習した児童が授業の最後で、ジャムボードを用いた適用問題に取り組みました。教師は、本時の目標がしっかりと理解できているか、画面を確認し、習熟の程度に応じた指導を行いました。

3年生の体育「ハードル走」では、端末のカメラで走る姿の映像を撮影することで、一人一人が自分の体の動かし方を把握し、走り方を改善することができるようになりました。

6年の社会「天下統一への道」では、教師から提示された動画を一斉に視聴するのではなく、必要とする情報を、自分のタイミングで繰り返し視聴できるように、端末を利用して工夫しました。

「学習の個性化」の事例についてご紹介いたします。

4年生の社会「水はどこから」では、個々の児童の興味や関心に応じ、知りたいことや調べ方をドキュメントにまとめました。この場面は1つのファイルに児童全員が一斉にアクセスして、文書を共同で編集しています。

3年生の音楽「旋律をつくろう」では、WEBサイトのバーチャルピアノを用いて、個々がのびのびと旋律づくりを行いました。このように一人一人がヘッドホンを活用することで、自分の音に集中することができ、即興的に作成した旋律から音の動きについて学習を深め、広げることができました。

タイピングでは、「キーボー島」に取り組んでいます。朝学習や休み時間に取り組み、全国ランキングに登録される児童もおり非常に成果を上げています。

家庭学習では「スマイルドリル」に取り組んでいます。全学年の主要教科の問題を行うことができるので、端末を毎日持ち帰り、自分に合った形で学習を行うことができます。

「協働的な学び」は、様々な他者との協働を通して、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出し、一人の良い点や可能性を引き出す学習です。

3年生の算数「割り算の計算」では、ジャムボードを用いて、図を用いた説明が容易に行うことができます。個々の学習状況をお互いの画面を見て話し合ったり、全体の話し合いの場面では、児童が自ら大型モニタに無線接続し、全員で話し合いを通して学びを深めることができました。

また、グーグルドライブには、子どもたちの学習状況がサムネイルで映し出されるので、教師の意図的な指名やグループ分けなどに活用することができます。

5年生の国語「『町じまん』を推薦しよう」では作文の題材である町じまんについて、付箋を用いて、アイデアを出し合い、整理するブレインストーミングを行い、テーマを絞り込むことができました。

6年生の社会「天下統一の歩み」では先ほど人物調べをご紹介しましたが、そのまとめの際に、文章を個別に作成するのではなく、1つの文章をページごとに割り当てることで、友達のまとめ方をいつでも参照することができるようになりました。

4年生の社会「文化財や年中行事」では、児童の振り返りで、ドキュメントの共同編集を行いました。児童の感想の中の言葉を頻出順に大きくテキストマイニングで表示し、キーワードを確認することができました。

この学習では、スライドをグループの児童と同時に編集し、自分たちが調べた内容を協力してまとめ、プレゼンテーションを行うことができました。

今年度の中間評価では、子どもたちが学習を自分の問題として捉えたり、学習活動を振り返って次の学習活動を自ら生み出したりすることが課題であることが分かりました。総合的な学習の時間などの探究的な学習において、ICTをより効果的に活用することを推進していきたいと考えております。

続いて、校務のDXについて説明いたします。教員と児童が向き合う時間を確保するために、校務支援システムを活用した校務の情報化を進めるなど、組織としての業務改善を推進することが求められております。

情報の一元管理、連絡のデジタル化、共有による負担軽減、効率化による時間削減を視点として、校務のDX化を進めています。

校務支援システムC4thの活用です。児童に関する情報や行事予定など、情報を一元管理することで、検索する時間の短縮につながっています。そのほかにも文書印刷の手間や諸帳簿の作成時間の作成などにもつながっています。

C4th会議室では、意見を集約する際に効果的です。回覧したり、参集したりする必要がないので、参加者のアイデアを具現化するまでの流れがスピーディーになりました。

安心メールの活用です。学校だよりやお知らせ文書、希望調査のURLなど、連絡をデジタル化することにより、配付文書の印刷の手間が省けますので、時間削減と効率化を図ることができます。

保護者の意見を集約する際には、マイクロソフト 365 のフォームを使用しています。学校評価の保護者アンケートや児童の欠席・遅刻の連絡、PTA活動の係決めなど、紙で集約するものはほとんどありません。集計作業の簡略化や電話対応の負担軽減にもつながっております。

児童用端末を活用して、欠席した児童への連絡を行っています。クラスルームのストリームに連絡事項を伝えたり、学級通信を送付したりしています。また長期欠席児童については、グーグルミートを使って連絡をとったり、授業の様子を参観できるようにしたりすることで不登校対策にも繋がっています。

データの共有についてです。校務分掌のデータをNASで共有することはもちろんですが、各学級で作成したデジタル教材もクラウドで共有し、画面は端末で活用した教材の一覧で、どの単元でどのアプリケーションを使用したのか毎年朱書きにて更新しています。

取組の成果として、これまで費やしていた時間の大幅に削減できたことや、情報伝達がより正確にスピーディーになったことが挙げられます。年度途中の自己評価においても業務改善を推進することができたと捉えておりますが、新しい取り組みに対応するために、必死に覚える必要があるため、心の余裕がないという声も上がっております。一層負担の軽減を進め、負担感が軽減されるよう努めていきたいと思っております。

以上、桔梗小学校のDXの取組について説明いたしました。他にも、高学年で教科担任制を取り入れたり、外部人材を活用したりすることで、多様な人材が児童に携わる機会を増やしています。

今後も、子どもたちの可能性を引き出す学びを進めていきたいと考えております。

■大泉市長

ただいま、桔梗小学校から説明がありました。皆さまのご感想などにつきましては、協議事項ウ 意見交換 で伺いたと思います。

それでは、給食の試食に移りたいと思います。

■桔梗小学校近江校長

ご案内いたします。

(校長室へ移動し、給食試食)

■大泉市長

それでは、事務局からの函館市がめざす「令和の日本型学校教育」についての説明や、桔梗小学校の取組の発表、校内視察なども含めてご感想を、皆さまにお伺いしていきたいと思っております。どなたかご意見いただけますでしょうか。

■木村委員

まず、校内を参観させていただいて、非常に子どもたちが落ち着いて、学習に取り組んでいるなという、第一印象です。先生方の指導力、校内研修等を通じて、きちんと力がついていいる先生方が、多いなという風な感想を持ちました。DX、私一年半前に退職して、つい最近ですけど、一年半でこんなにいろいろと変わっているのかっていうのを、すごく感じました。もちろん桔梗小学校さんが、先進的な取組をされているっていうのは、重々承知ですけども、それを考えてもすごく進んでいるなということで、子どもたちが「個別最適な学び」や、「協働的な学び」っていうことで効果的に活用しているなということを見せていただきました。

お聞きしたいのですが、こうしたとっても素晴らしい取組が、この学校だけに収まらず、例えば中学校との連携の部分とか、あるいは小学校の中でのいろいろな情報交換とかすることを、おそらくされていると思いますが、そういうことがきっと函館市全体の教育のレベルアップに繋がると思っています。ちょっとそれをご紹介頂ければと思います。私からは以上です。

■大泉市長

それでは質問について、回答をお願いします。

■桔梗小学校近江校長

はい。ご質問ありがとうございます。

まず、あの本校の授業の様子を見ていただきましたが、これはここ1年、2年で育てた姿ではないかなと、私も2年目を迎えますけれども、前任者の方が先生方と一体となってきた賜物。そういう意味では学校力向上事業というものがございまして、そちらの方に桔梗小学校がこの4～5年の間で取り組んできた、そういうことの賜物ではないかなと認識しています。

あと、ご質問いただいた他の学校との連携等については、本校はコミュニティスクール、いわゆるCSと呼ばれていますが、桔梗中学校の校区をコミュニティスクールと推進している地域ですけれども、そのなかで中学校との連携では、中学校の先生方が、小学校の方が先に交流している様子を見に来て、中学校の方でも使えるようにする。小学生が本校で培った力を、中学校でも発揮できるようにということで、そのような交流もさせていただいています。具体的なものとしましては、今お話ししたこと、さらには文面化・可視化して、発達の9年間、発達の段階を、このコミュニティスクールの中で作りまして、これを共有することでどこまでできて、中学校ではどこからスタートできるのかなと、今進めているところです。

小学校横の繋がりということでは、中の沢小学校が同じように進めています。また、小学校では校長会・教頭会がありますので、その中で函館市ではGoogle chrome（グーグル クローム）を使っていますが、校長・教頭もそれを使って、子どもたちがやっていたGoogle

Classroom（グーグル クラズルーム）を校長会の部会Classroom（クラズルーム）をつかって、Google Meet（グーグル ミート）を使って打ち合わせを行ったり、そういう公務で使うというところをなるべく多くしていったら、それを子どもたちの指導にしやすいようにして、先生方に伝えやすいようにしていくところです。現状はそのようにして、広がりをもたらすことができるかということです。

■大泉市長

ありがとうございます。よろしいですか。

その他ご意見ありますでしょうか。

國谷委員どうぞ。

■國谷委員

今日は学校を見学させていただきましてありがとうございました。給食を試食しているときにも申したんですけれども、一言でいうとまた小学生に戻って、学び直したいなというくらい、楽しそうに小学生の生徒さんが、授業を受けているのを見てですね、我々が勉強していたころと変わったなど、印象を受けました。社会の授業なんかも暗記とか詰め込みではなく、NHKの教材を入れて、それに基づいて歴史上の事実を自分なりにまとめたりとか、考えて自分の考えをまとめるみたいなのが、非常に整理されている授業です。英語の授業も、我々のころは英語の授業は小学校ではなかったんですけれども、楽しそうに机に座って、先生のしゃべったところを繰り返してしゃべった授業じゃなくて、生徒同士の会話形式の楽しそうな授業を見ていると、自分も子どもに戻って参加したくなっちゃいました。ありがとうございます。

去年も実は、私この場で質問させてもらったことですが、ICTサポーターの方のことで、予算的な部分で何年も何年もやれるものかどうか分からない、というような答えをいただいた記憶をしているんですけども、どうしても授業をやるにあたって、先生自身がICTについて精通していないと、なかなか生徒さんに対してICTを用いた授業もできないだろうし、今の教育と昔の教育との合間の隔たりを埋めるべく、このICTサポーターの役割って今後更に重要になってくると思いますので、今後の予算や見通しを教えてくださいと思います。

■小笠原学校教育部長

質問ありがとうございます。ICTサポーターの件ですが、各学校の状況等を踏まえて、実際に学校にICTサポーターが入って、例えば授業で使うソフトウェアやハードウェアの活用を補助していただくことができますので、先生方ができるだけ早く自立してICTを活用していけるのを目指しながらも、予算を要求していきます。

■大泉市長

よろしいですか、國谷委員。

■國谷委員

はい。

■小葉松委員

本日はどうもありがとうございました。先程、学校からの報告にあった職員からの声のところ、便利だと感じる心の余裕がないという赤字でのコメントが出てまして、これは私の世代で考えると、まあもっともだよなと思います。私自身は随分前、20年ぐらい前から学校で性教育のお話をしていて、最初の時からパソコンでパワーポイントで、講演というスタイルをとっていたので、昔はパソコンってなると、プロジェクターに繋げる先生が〇〇先生しかいないって時代がずっと長くて、今回コロナの危機によって加速したんだろうなという事は、みなさん明らかだと考えていらっしゃると思うのですが、そこで先生方の中には、かなり負担に感じている先生もいっぱいではないかと私は想像しています。

特に経験年数の長い先生ほど、やっぱりICTを学校で教わることはもちろんないですし、自分で勉強してやらなければできなかった先生方も一定数いて、この心の負担に感じて

いる先生の割合は一体どのくらいいるんだろうととても気になっていて、そういう先生方はベテランですから、デジタルには弱くても他に良い面はたくさんあるにも関わらず、こういうICT化していくことによるストレスで、心が病んだりしている先生がいないのかとちょっと職業柄心配になってくるのですが、そのあたりは現場としていかなものかとちょっとお聞かせいただければありがたいです。

■桔梗小学校近江校長

はい。ありがとうございます。

まず、先生方のいわゆるICTに関わる資質能力ですとか、研修についてのお話をいただいたんですけども、まず本校では、これまで学校現場での研修といいますと、各教科ですとか、生徒指導上の指導方法ですとか、その対応についての研修が多かったんですが、本校の研修はICTを授業の中で改善する。どのように改善することが可能なかっていうところにきましたので、まず研修の中に直接入れ込む、別に端末・パソコンの研修があるわけではなくて、研修そのものが端末を使ったものになっている。それはやっぱり今言われています、校務とって、先生方が子どもに指導すること以外の仕事があるんですが、校務の中でDXを進めていくっていうことに繋がっていています。

初めはやはり、皆さんそうだと思うのですが、抵抗があったり煩わしさもあると思うのですが、校務の中でどんどん使っていく、その後に良さが伝わっていきますと、「実際授業で使ったらこんなことに使えるね」と。

全部の研修会で言われてることでありますが、授業の上手な先生ほど端末の使い方が、使いどころが上手。どこで使えばいいのか、すごくわかるんだそうです。そういうお話よく聞きますので、実際端末使えるようになると授業も上手になるのか、というその逆の考え方です。そういうことも、先生方にも少しずつ浸透してきています。

また、研修も何時間もやるということではなくて、本校では機会あるごとに「15分ですよ、20分ですよ」と、そういう短い研修を一つずつ積み重ねていく、その他、興味・関心に応じて参加してもらって研修も設けたりして時間をつくるようにしていますので、また慣れなければならぬという負担感が残ってはいるんですけども、端末を使った良さ、仕事を進める上でも、授業を進める上でも、保護者の連絡の上でも、その良さがだいぶ伝わってきているところがあると思います。少しずつ今進めていこうと思っています。以上です。

■大泉市長

はい。ありがとうございます。その他にご質問等ありませんか。

はい。どうぞ。

■神田委員

先程、児童が毎日、端末を持ち帰っていると伺いました。その中で授業用端末を使って欠席の連絡をされているとか、もし長期欠席されているお子さま、不登校、お家から出られない児童、子どもたちがその端末を使って、それぞれの学習を継続されているのかなど、先程のお話でちょっと思いました。私、保護者の立場としては、やはり子どもが学校に行けなくて授業が遅れてしまうということをすごく心配にもなっていますし、その部分がこういうことでクリアされていっているのかなどちょっとお話を伺って思いました。

もう一つ質問なんですけれども、子どもたちは様子を見る限りでは、すごく端末の使い方が、もう私なんかができないようなことをされていて、使いこなせているんだなと思っているのですが、親の立場として、自分の子どもが端末を使っているのをなんとなく見てはいますけれども、もしなにか困ったときに教えてあげられることができないかと思いました。

桔梗小学校さんはすごくDXが進まれている、状況を見る限りでは、保護者さん達にも理解というか、どの程度まで桔梗小学校さんの取組を理解しながら、応援しながらっていうのはちょっとおかしいですけども、保護者さんたちはどう思っているのか気になったのですが、教えていただけますでしょうか。

■桔梗小学校近江校長

はい。今お話しいただきましたことについてですが、保護者が、子どもたちが、今どういう状況かって、学習参観っていうときに見ていただくのが、一番わかりやすいところだと思います。本校でも学習参観、これまで各学期ごとに数回行ってきましたが、その中でどんどん端末を使った、通常使っているものですから、自動的に端末を使った授業にはなるんですけども、そういう機会を捉えてどんな使い方をしていたり、どういうことに気を付けて使っていたり、また子どもたちが、どんな事で端末を利用することによって、学習効果があるのかなという様子を見ていただいています。

お話された通り、たぶん苦手と思う保護者の方もいると思うのですが、学校では、ほぼ保護者の皆さんは例えば携帯、今のスマホですので、スマホを使っているのと、今子どもたちが使っているchrome book (クロームブック) はそこまで違いはないと思います。

ですから「保護者が便利だと思って使っているものを子どもたちが、今少しずつ学習に取り入れていっているんです」ということを、学校便りですとか懇談会等でお話しさせていただいて、その端末利用の理解を得ているところです。

導入当時どんどんその仕組みを学校現場に取り入れているときには、保護者からの質問の電話は結構来ていました。それに担任の先生方が最初は自身無さそうだったんですけども、相談件数増えてくると、先生方もどんどん慣れてきました。

小葉松委員がお話しされたように学校の中に一人か二人しかいないってことではなくて、担任がそのことについては現状答えられる。保護者の対応ができるようになってきているのかなと思っています。それでも、まだまだこれから新しい使い方もきっと出てくるかと思えますので、いただいたお話はとても大事だなと思って聞いておりました。ありがとうございます。

■大泉市長

ありがとうございます。教育長、何かありますか。

■藤井教育長

校長先生は以前からICTの方では有名な方ですし、新保先生と共同で研究されているというふうに伺ってました。お話しを聞いていまして、やはり校長先生がDXを推進されていると思いますが、それに加えて、新保先生とか未来大の先生とかいろいろな共同研究のような形で、そういう研究者の方にも入っていただいていると先程の学校からのプレゼンにありました。具体的に何かこういう形でというのがあれば教えていただきたいのと、加えて、もし可能でしたら、校長先生ご自身も縄文に関して作ってらっしゃるものがあるということだったので、恐らくどこかの教室でもやられてるのではないかと、それらを教えていただければと思います。

■桔梗小学校近江校長

はい。ありがとうございます。

私の方で外部との連携ということでは、このICTに関わっては、DXについて文部科学省にコーディネーターの方がいらっしゃいまして、その方々にお願いをして、例えば来校いただいて指導いただいたりですとか、研修内容について相談をさせていただいている。

この度はグーグルが函館市で研修を行いまして、その講師の先生方も連携をさせていただいて、なんとか全国で上手くいっている例をたくさんお聞きして、取り入れられるところを、今取り入れてっているところでございます。

また、今ICTだけではなく、子どもたちに必要な学びということで、北海道学というものがあります。これは北海道、例えば函館としたら縄文遺跡・世界文化遺産、そういうものもICTと掛け算で取り入れていきたいと思いますということで、いろいろと勉強させていただいておまして、その中で端末の使い方ですとか、可能性については、学ぶことができているふうに思っています。

なるべくそういう機会や場所、本校の職員も誘ってどうですか、と声かけさせていただい

ておりまして、私の方で紹介したものに各自で参加したりですとか、取り入れていくような、少しずつそういうスタイルができてきているのかなと思っております。

北海道学ということでは、今ご紹介いただいた縄文に関するビデオクリップです。縄文遺跡のビデオはあるのですが、どちらかという和一斉授業のように説明する、ものによっては30分～40分長いビデオが作られているんですけども、私たちが今手掛けているビデオは、子どもたちが自学で自分で選んで短い時間で見られるものを作ろうとしています。一本紹介させていただきます。

(動画視聴)

この90秒前後のビデオは、ほぼ作っているのは先生方のグループで、最後にプロが仕上げたこのようなスムーズな動きになっています。

現在函館市では、小学3年生を対象に、大船の遺跡を全児童見学に行くことになっています。その前後に短いビデオを見て何回か学ぶ、自分で調べる、もう一回見てみる。動画ですので何回でも見ることができますし、止めてみることもできます。そういうことを、端末でそれぞれの子どもができるように動画を作っています。また、ビデオの最後では問題提起をして、それにむけて子どもたちがさらに調べる。こういうのを昨年度作りまして、今年度はさらに10本つくっていく予定で進めています。このように動画といいますか、端末を利用した学び、そういうものに結びついていくので、一緒に進めていく必要があるのかなと思っています。

■藤井教育長

どうもありがとうございました。

■大泉市長

ありがとうございます。皆さまから、課題ですとか、取り組むべき事項につきまして、いろいろとご意見をいただいたところであります。

それでは、その他に全体を通して、ご意見等ありますでしょうか。

■國谷委員

質問というか、今日このDXとは、視点がずれている話なんですけれども、今年の夏プールの問題で、プールの授業やるかやらないか、バスの輸送とかの問題で、全部の小学生ができない形になり、だったら止めてしまおうということがあったと思うのですが、体育の授業の中身のことで、北海道の冬の体育のことについて、本州から見ると北海道の人って、皆、雪があつてスキーだとかスノボができるものだと思うんですけど、大学で東京行かれてそういうこと聞かれたりしませんでしたか。北海道から来たんだ、スキーとかできるんでしょううみたいな。

■大泉市長

やるんですよ。私、江別だったから。あるんですよ。スキー授業が。

■國谷委員

私も、函館で小・中って過ごしてないので、スキー授業があつたんです。冬楽しむべきスポーツがあるんですけども、函館はスキー授業が無ければ、スケート授業もほとんどないような状況ですから、初めて高校卒業して本州行って、北海道の人はスキーもスノーボードもすごいんでしょうと言われて、やっている家庭の子どもはできるんですけど、そうじゃない生徒は全くできない。うちの子どももできない。

体育の授業というのは、結局その学校でやることによって、生涯を通じて、その子どもは大人になって楽しむために授業としてやるんだというふうな認識でいるんですけども、そうすると北海道と函館に、子どもたちが大人になって戻って来る段階になったときに、そういうウィンタースポーツができるような能力を身に付けていけば、冬の楽しみとなって、より積極的に戻ってくるモチベーションに繋がると思うんですけども、冬楽しめるものが何もないとか、ただ寒いところに帰るのは億劫だなとか、どちらかという、暖かいところで過ごした方が冬はいいなという発想に繋がると思います。

当然予算の都合とかもそういうものもあると思うんですけども、冬の体育の授業にそういうスキーやスノボであるとか、北海道の独自のウインタースポーツを、この函館でもやることはできないものだろうか。

今日、市長と会うことができるので、是非その思いをちょっと伝えたいなと思ひまして、時間がなくて大変恐縮だったんですけども、意見をさせていただきます。

■大泉市長

はい。江別はありましたといひましたが、今もあるのか正直わかっていないところなんです。確かに、冬の寒い北海道に東京に出てから戻ってくるかというような、故郷への愛着ということに、ウインタースポーツが教育にあるのは良いのかもしれないかもしれませんが、基本的な私のイメージとか思ひとして、いわゆる教育のカリキュラムの一つになりますよね。まずはたくさん科目がある中の体育。体育の中のさらに冬の体育、その中で何の競技を選ぶかということに、市長という立場で、何か踏み込むというのはマイクロマネジメントっていうか、入り過ぎではないのかという印象をもっています。

プール学習のときにも、理解はしている部分ではありますが、私はそのことについて敢えて言及しなかったのは、入り込み過ぎかなと細かいところに、っていうのがありました。

國谷委員からの意見は、大変貴重な意見だなと個人的には感想として思っています。大事なことだと思うのですが、今私が何かスキー学習、スノーボードやったらいいんじゃないかってことが、私の意見としてのここで何か言うのは違うっていうか、そういう場面ではないかなと思ひています。そもそもどうなのでしょう、可能なのでしょうか。そこもよく分かっていないのですが、いかがでしょうか。

■藤井教育長

では私から。私は昭和26年生まれで、小学校でも中学校でもスキー遠足ありましたね。ただスキー学習はなかったです。一方ですね、私は教員になりましたが、やっぱり七飯町ですとかね、そういうところではスキー学習があつて、かなりの頻度でグラウンドに坂を作つてやつたりもしていましたね。

ただ今は、それはなくなっているんです。それはやはり子どもたちの冬の過ごし方が多様化しているんですね。例えば冬でもサッカーをやつてる子たちは、土日っていうとサッカーですとか。なので、家庭で土日はスキー連れて行くとか、スノボに連れて行くという家がたくさんな訳でもないんですね。ということでスキー遠足をやろうにもスキーを持っていない子どもが多くなつて、そういう訳でスキー遠足がなくなつていった経緯があります。スキー遠足のときも皆スキーを持っているわけじゃなくソリを持つてくる子とかもいたことはいましたが、今は難しい。そのくらい冬の過ごし方が多様化していることなのかなと捉えております。

そんな状況ではありますが、國谷委員のそういうのがあれば戻つて来るのではないかというの、確かに私も思ひしております。

■大泉市長

よろしいでしょうか。

■國谷委員

今日はもう時間のないところでの話ですので。はいこの程度で結構です。ありがとうございます。

■大泉市長

他にになにかありますでしょうか。ないようなので、最後に私から良いでしょうか。もうあまり時間もないのですが、まず、今日ご準備された教育委員会の皆さん、そして桔梗小学校の校長先生をはじめ、皆さんにご準備、それから素晴らしい会議だったなと思ひます。大変感謝を申しあげたいと思ひます。

そしてDXをはじめ、さまざまな取り組みについて紹介をいただきました。どれもですね正直な感想として素晴らしいなという印象を持っています。大変高く評価していますし、敬

意を表したいと思います。

それから一言いうことではないのですが、私自身の公約の中にも書いていることでもあることで、すぐ何か実現してくださいということではないのですが、将来的に今から議論していきましょと、将来的に叶えばいいなと思っていることがあるので申し上げたいと思っています。

今人口減少などありますが、例えばUターンして戻ってきてくれるというのが増えるのは非常に実はありがたいことです。高校を卒業して、東京に出るとか羽ばたいていくのは勿論良いことですが、東京の大学を出て、例えば東京に就職するか、あるいはUターンしようかって二つ気持ちが競り合っている学生がいるとしますよ。そういうときにUターンしようかなと思っても、元々函館にどんな企業があるかを全く知らない、なんとなくもやっとした気持ちで埋まっちゃうじゃないですか。ですから他の県とかではよく行われていることですが、例えば小学校くらいの時期から、函館の守るべき企業があつて素晴らしい地元企業があるわけで、企業の皆さんとお子さんが触れるような機会があると良いなと思っています。

学校に、どこかの製造業でも良いし農業の方でも説明に来てくれることがあつても良いですし、あるいはお仕事の現場にお子さんが見に行くような機会があつてもいいんじゃないのかなと思います。ふるさと企業教育というのでしょうか、そういったことが今もやってらっしゃるのではないかと思うのですが、もっともっとそういうのが増えてくることによって、Uターンをするような若い人が増えてくるのではないかと思っています。学校現場が混乱しない迷惑かけない範囲で、そういうことを是非推進してもらえればなと今思っています。今後議論の一つとしていただきたいと思っています。

もう一つは、もっと先の話で重要度は低いのですが、私が保健福祉部長のとき、弁当の日という取組に出会うことができました。西日本で非常に盛んに行われているそうです。年に5回かな、給食を持って来ないで5年生、6年生だったかな、弁当を全員持って来ると。それはお母さんが作るのではなくて、お子さんが献立を決めて買い出しをして自分で料理をして弁当を持って行って、洗ってというもの。話すとも物凄く長くなりますが、命をいただくとか、家族への感謝、あるいは基本的な生活力を身に付けるのには、非常に料理というものが良いということなのだそうで、成功例が2,000校ぐらいに広まっているんじゃないかと思えます。

いろいろと保健福祉部の時に紹介するイベントなんかもしたのですが、たぶん学校で取り入れるのは難しいことだろうと思いますが、校長先生がよしやろうじゃないかと言って他の先生達から賛同が得られるということになれば、どこか1校がやればきっとできるといことなんだと思うんですね。そうするとドミノ式に取り組みが広がる可能性もあるかと思えます。また情報共有をさせてもらいたいなと思えます。今何かしてくださいということでは全くないですが、一つ情報提供ということで申し上げました。

最後にですね、学力の向上に今日拝見させていただいた、TT（ティーム・ティーチング）は非常に良いのではないかというふうに聞いておりました、これが進んでいくことは良いのではないかと思うんですが、質問になっちゃうかも知れませんが、これって函館市が進めて行くことができるのでしょうか。それとも全道統一でしか進まないものなのでしょうか。教育長お分かりでしょうか。

■藤井教育長

はい。道から一定数の加配がありますが、現在、函館がこれだけTTが充実しているっていうのは函館の独自予算を組んでいただいているからです。特別支援教育の支援員、あとは免外で算数であるとか、理科であるとか、そういう人をですね、予算をいただいて採用しているからです。桔梗小学校は650人の子どもに対して、総スタッフは46名ということでした。ただ道の基準であればぐっと少なくなると思います。十分かどうかと言いましたら、もっと多くても良いということですので、教育委員会といたしましては、いくらたくさん予算いた

だいても良いと思っています。

■大泉市長

ここで何か今発言する場ではないかなと思いますが、仕組みはよくわかりました。

その他に何かございますか。

ないようなので、進行を事務局にお返しします。

■金野教育政策推進室長

以上で本日の協議事項は、すべて終了いたしました。

本日の会議の開催にあたりまして、ご協力いただきました桔梗小学校長の近江様をはじめ、職員の皆様に改めてお礼申し上げます。

これをもちまして、令和5年度函館市総合教育会議を閉会いたします。